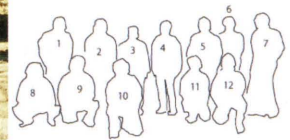


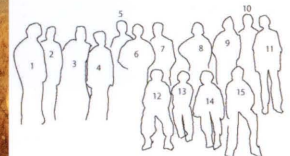


ペルセポリスに立つ増田精一先生



シリア，テル・ルメイラ遺跡調査(1979 年)の増田先生[肩書はすべて当時のもの]

- | | |
|------------------------------|------------------------|
| 1. 廣瀬一隆(廣瀬味噌社長) | 2. アリ・タハ(パルミラ博物館副館長) |
| 3. 江上波夫(古代オリエント博物館長) | 4. 6. 不明 |
| 5. 折田魏郎(JICA 専門家, ICARDA 獣医) | 7. アブダラ・ショアハ(ルメイラ遺跡番人) |
| 8. 川西宏幸(古代学協会研究員) | 9. 山下守(筑波大学院生) |
| 10. 増田精一先生 | |
| 11. 石田恵子(古代オリエント博物館研究員) | 12. 林俊雄(古代オリエント博物館研究員) |



シリア，クミナス遺跡調査(1981 年)の増田先生[肩書はすべて当時のもの]

- | | |
|------------------------------|-------------------------------|
| 1. 脇田重雄(古代オリエント博物館研究員) | 2～5. 7. 11. 15. クミナス村人(発掘作業員) |
| 6. 折田魏郎(JICA 専門家, ICARDA 獣医) | 8. 常木晃(筑波大学院生) |
| 9. 田村(早稲田大学院生) | 10. 和田久彦(早稲田大学院生) |
| 12. 増田精一先生 | 13. 尼崎貞子(ボランティア) |
| 14. 服部厚子(筑波大学院生) | |

増田精一先生のご逝去を悼む

筑波大学の大学院、学群において先史学・考古学コースの初代教授を務められた筑波大学名誉教授増田精一先生は、2010年1月19日、享年87歳で肺炎のため急逝された。

先生は、1922年（大正11年）8月12日東京生まれ。東京府立第二中学校、山形高等学校を卒業後、1942年10月に東京帝国大学に入学。翌年12月に学徒出陣で召集され、終戦までの間、主にインドシナ戦線において陸軍航空隊の軍務につかれた。復員し、1948年3月に東京大学東洋史学科を卒業、半年間の都立高校教諭勤務の後、10月より東京国立博物館に奉職された。東洋課で綏遠青銅器や日本の埴輪など考古遺物の研究に取り組み、1956年からは戦後日本の最初の本格的な海外学術調査であった東京大学イラク・イラン遺跡調査団へ参加した。両国では、バクーン遺跡やサラサート遺跡など先史時代遺跡の発掘調査と、デーラマンなど鉄器時代初期の墳墓などの調査を主に担当された。

1965年、東京教育大学文学部史学方法論教室の講座増設に伴い、第2講座（考古学）の助教授として東京国立博物館から転任された。1971年から北東イランのタペ・サング・チャハマック遺跡の発掘調査に着手、1977年まで4次にわたって同調査を継続された。この調査は、これまでほとんど光が当てられていなかった北東イランの農耕の始まりと展開の研究について新たな展望をもたらす画期的なものとなった。1974年からは、イランだけでなくシリアでも考古学の調査を始められた。これは、ユネスコから依頼を受けた、ユーフラテス川にできる巨大なダム建設のために沈んでしまう遺跡群の事前調査で、テル・ルメイラとテル・ミシオルフェという2つの主に青銅器時代の遺跡を発掘調査された。

1975年には教授に昇任されたが、本学にとりこの時期は東京教育大学の廃校から筑波大学開学までの激動期である。増田先生は、筑波大学歴史・人類学系および学群先史学・考古学コースの設立に深くかわられ、その初代教授として運営に尽力された。また、1979年に東京池袋に開館した日本で初めての西アジア考古学の専門研究施設である財団法人古代オリエント博物館の設立にも奔走されている。こののち1986年に筑波大学を定年退官されるまで、ほぼ毎年のように西アジアに出かけて調査を続けられた。大学では教授職のみならず、歴史・人類学研究科長、歴史・人類学系長、評議員を務められ、大学の発展に多大な寄与をされた。筑波大学を退官されたのちも、東京家政学院大学教授として考古学の発展と学生教育に尽力された。1998年秋の叙勲で勲三等瑞宝章を受章。

増田精一先生のご研究の主題は非常に多岐にわたっており、俯瞰することは浅学の筆者には不可能だが、そのいくつかについて触れておこう。地理的に本邦から遠方へと紹介すると、まず第一に古墳時代の埴輪に関する深い造詣がある。1950年代から『ミュージアム』や『考古学雑誌』などに多数の論文を執筆されている。その成果は、1976年に新潮社から出版された『埴輪の古代史』に結実した。第二に綏遠青銅器や馬具などの金属器に関する諸論考で、東アジアの騎馬民族や騎馬習俗に関わるご関心とその背景となっている。『ミュージアム』、『史学研究』、『東方学』に多くの論文があり、著作としては『日本馬事文化の源流』（芙蓉書房出版1996年）な

どがある。第三に東西交渉史に関わるご関心で、先史時代彩文土器の文様からササン朝ガラス器に至るまで、文様や遺物型式などのダイナミックな比較研究が挙げられる。やはり『ミュージアム』や『考古学雑誌』に掲載された諸論考の他、『漢とローマ』(平凡社 1970 年)や『砂に埋もれたシルクロード』(新潮社 1970 年)が代表的な著作である。第四には西アジアの考古学に関わる報告や考察であり、タペ・サンギ・チャハマックやテル・マストゥーマなどの概報、『オリエント古代文明の源流』(六興出版 1986 年)や『古代オリエントの神々』(弥呂久 1994 年)といった著書を挙げることができる。

増田先生の幅広い学問のご関心は、例えばシリア新石器時代の土器や縄文土器の文様から現代イランのウールの靴下や日本の扇までと幅広く、時空間を自在に飛び回っておられた。その発想の豊かさは、時として私たちの想像をはるかに超えた議論に到達されることもあり、凡人には捉えようもない時もあった。先生のお近くで接しさせていただいた者の一人と言えることは、増田先生のご学問が机上の空論ではなく、まさに、「フィールドに基づきフィールドから考える」ことを身をもって実践されたことである。学群や大学院での学生教育に関しても、教室での講義にとどまるのではなく、学生たちを積極的にフィールドに連れ出されるのが先生のやり方であった。西アジアでも日本でも、多くの学生をフィールドに連れて行かれ、発掘の現場では時に厳しく学生たちを叱声され、そしてその中から多くの学生たちが育っていった。そうしたフィールド至上主義は、筑波大学の先史学・考古学コースの伝統ともなっている。

実は本号にも、増田先生が発掘されたり収集されたりした資料を研究対象とした論考が掲載されている。先生の残された大きな足跡に思いを馳せつつ、先生のご冥福を祈りたい。

常木 晃